

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集  
第 50 集 (2017年度) 2018年 3 月発行 : 17-32

## 大学アクレディテーションとアメリカ教育審議会

坂 本 辰 朗



# 大学アクレディテーションとアメリカ教育審議会

坂本辰朗\*

## 1. はじめに：問題の所在と本稿の課題

大学アクレディテーションとは、アメリカ合衆国で始まった大学教育の質保証のための制度である。19世紀末に、アメリカ各地にボランティアな組織として誕生した諸アクレディテーション団体は、それぞれの管轄地域を定めて、教育の質保証の諸活動をおこなっていた。そこでのアクレディテーションとは、「大学人たちが結成したボランティアな非政府団体が基準認定をおこない、そこで適格判定がおこなわれた場合のみ、当該大学をその団体のメンバーとして加えることによって高等教育全体の水準の維持さらには向上を図ろうとする努力」として定義されることになった。

だが、20世紀に入り、アメリカの史上最初の高等教育拡大期となる1920年代になると、それぞれの地域を越えた、全米的な「基準」が必要とされるようになる。本論文で問題にしたい論点とは、ここで言う全米的な「基準」を決めたのはいったい誰であったのか、というものである。本論文で筆者が着目したのは、個別アクレディテーション団体ではなく、アメリカ教育審議会（American Council on Education, 以下、本文中ではACEと略記する）である。この団体は、もともと、第一次大戦中、高等教育機関への財政的配分問題に端を発して発足したものであったが、1920年代になると、多くのボランティアな非政府団体を傘下におさめるようになった。筆者が別の機会に明らかにしたように、それは、高等教育関係諸団体のたんなる情報交換サロンであったのではなく、アメリカの高等教育という巨大なシステムの形成、すなわち、一大高等教育ヒエラルキーの構築という作業のための不可欠な機関となったのである（坂本, 2009）。本論文との関係で言えば、当時存在した諸地域のアクレディテーション団体を糾合して、それらの地域アクレディテーション団体が採用する「基準」のおおもとの「原基準」ともいべき「全米のカレッジ・スタンダード」を創りあげるのに決定的な力を発揮したのである。本論文では、ACEが1920年代におこなった、アクレディテーションに関する事業のうち、いわば表の事業と裏の事業の二つを取り上げ、分析していく。これらはいずれも、ACEが公刊した出版物に中にはもちろん、これまでの先行研究でもまったく言及されなかったものであるが<sup>1)</sup>、今日、私たちが知るようなアクレディテーションのコンセプトと制度が成立していく過程を理解するためには、これらが不可欠な作業であると考えからである。

## 2. 全米のアクレディテーションの展開

19世紀末から各地域で続けられてきた、中等学校と大学・カレッジ双方に対するアクレディテ

---

\* 創価大学教育学部教授

ションの活動は、20世紀になり、大きな転機を迎えることになった。すなわち、地域ではなく全米的な規模でのアクセディテーション活動の始動であった。

1900年、ハーバード、コロンビア、ジョンズ・ホプキンスなど、Ph.D.学位をもっとも多く授与していた諸大学が結成した、アメリカ大学協会（Association of American Universities）は、大学・カレッジのアクセディテーションの歴史を画するものであった（Harclerod, 1980, 23）。アメリカ大学協会がもっとも関心を払ったのはアメリカ合衆国の Ph.D. 学位の国際通用性であった。しかしながらその企ては、「大学とはどのような教育機関なのか」を定義することなしにはありえない。同協会は、1913年11月の年次大会で、ある大学の卒業生が大学院に進学した際に、最終的な学位取得までにどの程度の期間を要するのかという観点から、A, B, Cの三つのグループに分け、これを区分せずに並べた「認定大学リスト」を発表した（AAU, 1913, 56-62）。以降、アメリカ大学協会によるアクセディテーションはもっとも権威あるものとして、全米の大学に受け入れられていくと同時に、同じように全米的な団体が、それぞれが独自の基準でアクセディテーションを開始していく。

一方、元来、全米的な教育情報の収集と普及を主要な任務としていた連邦教育局も、大学の教育の評価という問題に早くから多大の関心をもっていた。全米の大学数を把握するとしても、それには「大学とは何か」が明確でない限り、不可能であったからである。連邦教育局は、その1886-87年度の『教育長報告』で初めて、全米の女性カレッジを「A区分」（真正の女性カレッジ）と「B区分」（セミナーやアカデミー並みの自称女性カレッジ）に分けて掲載するという方針を採用した（Report of the Commissioner of Education, 1886-1887, 643, 645）。この二区分制がうち切られた1910年、教育局は高等教育専門官というポストを創設、前アリゾナ大学学長であったバブコック（Kendrick Charles Babcock, 1864-1932）をこれに任命した。その任務とは、女性カレッジだけでなく合衆国のすべての大学を対象にした分類をおこなうというものであったのである。この分類作業は極秘に進められたものの、作業完了直前にその情報が漏洩することになり、連邦教育局には全米各地の大学から抗議が殺到し、バブコックのリストは正式発表を妨げられることになった（Lykes, 1975, 29-34, 45-46, 49-51）。以降、教育局は少なくとも公式には、みずからが大学を評価するという試みから手を引くことになったのである。それでも教育局はアクセディテーションには関心を寄せ、その広報で、『アクセディテーションを受けた高等教育機関』リストを何度も出版している。しかしながら、これは、前出の、アメリカ大学協会や地域諸アクセディテーション団体がそれぞれ公表したリストを集約したものにとぎず、それはバブコックをはじめとして、同一の基準で全米の大学・カレッジを分類しようと考えていた者たちにとっては、いかにも不満が残るものであったであろう。

中等教育、大学教育のスタンダード化という問題に大きな影響をあたえたもう一つの勢力が、20世紀初頭から設立が開始されたフィランソロフィー団体であった。中でも、1905年に設立されたカーネギー教育振興財団（Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching）は、それらの草分けであった（Lagemann, 1983; 坂本, 2002）。同財団の最初の事業は、退職大学教員へ年金を支給することであった。年金制度が未発達であった当時、この事業は、多大な注目を集めた。大学教員であれば掛け金をいっさい払うことなしに、退職時から年金を受給できることになったのである。しかしながら、このためには、当該大学が、財団が定める基準、すなわち、「カーネギーの大学基準」を満たして

いることが必要条件であった。すなわち財団は、当時、数多く存在した自称大学と真正の大学を峻別し、後者のみに財政援助をあたえようとしたのである。

「カーネギーの大学基準」の最初の条項は、当該大学が「少なくとも6人のフルタイムの教授を持ち、リベラル・アーツ・アンド・サイエンスの全4年の教育課程をもち、通常の4年のハイスクール、アカデミーの準備教育あるいはこれに匹敵するものを入学要件としていること」であった。そして、入学要件として示された「全4年のハイスクール、アカデミーの準備教育」の具体的な中身について、同財団は「<sup>ユニット</sup>単位」という概念を導入した。ここでは、ハイスクール、アカデミーなどの中等教育学校で、学生は、1回につき40分-60分の授業を1週間に4-5回、年間で36-40週受けるものと想定されている。ある科目を1年間に120時間学習した場合に1<sup>ユニット</sup>単位があたえられる。単位は、実際に必要とされる授業時間の総計にもとづいて計算されるのであり、授業の準備に必要とされる家庭学習の時間は計算されない。高校での4年間の教育課程は最低で14<sup>ユニット</sup>単位なければならないのであり、これを上記の計算法で算出したのである（Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1906, 38-39）。

カーネギー<sup>ユニット</sup>単位の公表は、その後のアメリカ合衆国の中等教育、大学教育の双方に決定的な影響をあたえた。それは、中等・高等教育間の接続関係を改善し、ひいてはアメリカ合衆国全体の教育制度に統一をもたらす、アメリカ的教育制度の構築のために、教育内容のスタンダード化を提唱してきた人々が築いてきた成果の総決算とも言うべきものであった（VanOverbeke, 2008, 143-170）。すなわち<sup>ユニット</sup>単位制という考え方によって、学校での学習が全米的にスタンダード化されることになったのである。「学習の成果を時間によってスタンダード化する」という発想そのものはカーネギー<sup>ユニット</sup>単位以前にも存在したが、カーネギー教育振興財団はこれを年金支給プログラムに組み込んだために、きわめて短期間に多数の大学によって採用されることになり、同時に中等教育学校の側の卒業要件として採用され、中等・高等双方の教育を規制することになった。

### 3. 全米のカレッジ・スタンダード実現に向けて

#### (1) カレッジおよび中等学校のスタンダードに関する全国会議委員会の創設

以上のような諸団体のアクレディテーション作業の動向に対して、1906年に結成された、「カレッジおよび中等学校のスタンダードに関する全国会議委員会（National Conference Committee on Standards of Colleges and Secondary Schools, 以下、全国会議委員会と略記）」は、これを俯瞰し、全米のカレッジ・スタンダードを検討しようとした最初の団体であった。この団体は、その前年、全米州立大学協会（National Association of State Universities）の年次大会で発議されたものであり、地域アクレディテーション三団体——ニューイングランド協会、南部諸州協会に加えて、ミッドルステート・カレッジ・学校協会——に、ニューイングランド・カレッジ入学認定協会（New England College Entrance Certificate Board）、カレッジ入学試験協会（College Entrance Examination Board）、カーネギー教育振興財団、および連邦教育長（職権によるメンバー）を加え、これを全米州立大学協会の代表が会長となって統率するという組織であった。

全国会議委員会はその憲章に「本委員会の目指すところは、入学のスタンダード、大学・カレッ

ジ・中等学校に共通の関心となる諸問題、およびその他参照すべき問題を考察することにある」(National Conference Committee, April 17, 1908)としたが、その基本的優先関心は、以下に見るように、年次大会の議事録に明瞭に現れている。

1908年の年次大会では、前出のカーネギー単位が議題に上がっているが、そこでは実務的な関心以上に、<sup>ユニット</sup>単位の定義そのものを議論の俎上に載せている。1911年の年次大会でも、同じく学習成果を規定する“hour”“count”“point”“exercise”“period”といった概念定義が取り上げられており(National Conference Committee, January 28, 1911)、各年度とも全体として、議論が微に入り細を穿っているという印象が強い。言い換えれば、カレッジおよび中等学校の「入学そのほかのスタンダードを決定する」という以上に「スタンダードに関して、その基本理念や概念までも議論する」という姿勢を見てとることができるのである。

この全国会議委員会には、先述のアメリカ大学協会は最初から加盟していない。1909年の年次大会では、アメリカ大学協会への加盟呼び掛けが決議されるが(National Conference Committee, October 9, 1909)、同協会はこれを受諾しなかった。同じように、アメリカ高等教育界の基幹組織のひとつアメリカ大学教務部長協会(American Association of Collegiate Registrars)も勧誘したが(National Conference Committee, March 24, 1917)、これにも断られている。

## (2) ACEによる全米のカレッジ・スタンダードの創設

ACEはその創設時から、審議会内部に創られた7つの委員会の一つとして「学習機会に関する委員会(Committee on Opportunities for Study)」をもっていたが、1919年7月21日の執行委員会で、この委員会の仕事を引き継ぐために、「情報とスタンダードに関する常設委員会を任命すること。この委員会は、地域的、全国的なスタンダード化団体と連携を図ることを任務とする」(ACE. Executive Committee, July 21, 1919)ことが決議されている。

では、ACEは前述の全国会議委員会をどのように認識していたのか。全国会議委員会の存在は1920年5月7日のACE執行委員会で議論になるが、その結果、「カレッジをスタンダード化している諸団体の基準を統一するという仕事を、カレッジおよび中等学校のスタンダードに関する全国会議委員会に引き受けてもらう可能性について、その検討を理事長に一任する」(ACE. Executive Committee, May 7, 1920)という結論になっている。これを受けて理事長のケイブン(Samuel P. Capen, 1878-1956)は、全国会議委員会をワシントンD.C.に招いて、ACEと合同で、全米のアカレディテーション諸団体を結集した、カレッジのスタンダード化についての会議を開催する案を全国会議委員会に通知する。そして、全国会議委員会の1921年3月10日の年次大会にみずから出席し、当該案を説明した。年次大会ではかなり長い議論がおこなわれたが、最終的に、ACEの要請を受諾する(ACE. Executive Committee, December 4, 1920)。こうして、1921年5月6-7日、アカレディテーション・システムの構築にかかわる関係者を一堂に集めて開催された大学教育のスタンダードづくりに関するワシントンD.C.会議は、スタンダード化のための制度模索への始動となったのである。

このワシントンD.C.会議の結果、ACE内のカレッジ・スタンダード委員会は、「スタンダードについての統一見解の策定をおこない、二年以内にこれを当該団体が採用できるのかを検討する」

(ACE. Committee on College Standards, November 26 and 27, 1921) という作業を開始した。そこに集結したのは、ニューイングランド協会、ノースセントラル協会、南部諸州協会をはじめとして、当時存在していた5つの地域アクレディテーション団体に2つの宗教教育協会の各代表、エンジニアリング教育推進協会代表、インディアナ州教育省代表、さらには連邦教育局代表——高等教育専門官のズーク (George Frederick Zook, 1885-1951) ——を加えた全部で10人の委員会であり、委員長には南部諸州協会の代表であり当時の高等教育界の重鎮、さらに、バンダービルト大学学長のカーランド (James H. Kirkland, 1893-1937) が就任し、これに ACE のケイプンが事務局長として入り、年内の報告書完成に向けて作業を開始した。

ACE カレッジ・スタンダード委員会は、本来は全国会議委員会との共同委員会であったはずであるが、実際にはその力関係において、この時点で全国会議委員会を完全に圧倒していた。事実、ACE は理事長のケイプンが委員会に入ったのに対して、全国会議委員会からは誰も入っていない。

ACE 内のカレッジ・スタンダード委員会は同年の秋には報告書を提出したが、ここには、1920年代初頭におけるアメリカ合衆国の大学が採用すべきスタンダードについての基本的な考え方がきわめて明瞭に提示されており、先に見た「カーネギーの大学基準」を参照しつつも、以降のアクレディテーションの基本的方向性を規定するものであった。

まず、「カレッジとは、非プロフェッショナルの学士号学位を授与するすべての高等教育機関を意味する」と定義した上で、「最小限度の必要条件」として、8つの原則およびスタンダードを勧告した。すなわち、(1) 入学者は、アクレディテーションを受けた中等学校で4年の課程を修了した者であること、(2) 卒業には、最低120セメスターアワー相当の履修を必要とすること、(3) 適切な教員組織を有していること。おおむね、100人の学生に対して最低8人 (8学科) のフルタイム教員が必要。教授となる者は、定評ある大学院で最低二年間の教育を受けたものでなければならない。学科長は博士号あるいはこれに相当する学位取得者であることが望ましい。一人の教員が1週16時間以上授業を担当すること、あるいは講義科目は除き30人以上のクラスをつくることは教育的効率性を危うくするものと見做すべきである、(4) 年間5万ドル以上の収入が必要。うち、2万5千ドルは学生納付金とは別の安定した収入源——<sup>エンダウメント</sup>大学基本財産が望ましい——から得るものでなければならない、(5) 相応の土地建物等の施設をもち、それらを効率的に運用しなければならない。とりわけ、最低8千冊の蔵書を持つ専門的図書館が必要、(6) カレッジの組織の中に予科を含んではならない、と続いた後、(7) カレッジの評価にあたり、以下の点に力点が置かれるべきである。カリキュラムの特徴、授業の効率性、通常学位授与のスタンダード、名誉学位授与については慎重であること、機関の品格、さらに学生を定評ある大学院・プロフェッショナル・スクール・研究機関へと成功裡に準備をさせているかどうか、最後に、(8) アクレディテーション団体が正規に任命する委員が審査をおこない報告書を提出するまで、いかなるカレッジもアクレディットされたものとはみなされない、と結んでいる (ACE, July 1922)。

委員会の議事録や委員たちと事務局の往復書簡等、ACE の内部文書を見ると、この最終報告書が出されるまでにその方向性を決定したキーパーソンとは、連邦教育局のズークであったことが明らかである。彼は、委員会が議論をおこなうにあたって最初に参照した、アクレディテーション団

体のそれぞれが定めていた基準を一つに集約した人物であった。さらには、委員会の報告書草案が出来上がった段階で、ケイブンに対して、「私たちの勧告は『カレッジのアクセディテーションにあたっての原則およびスタンダード』とすべきです」（下線は原文のまま）と述べ、「カレッジの具体的な定義を試みるにあたり、やや踏み込み過ぎたか、というのが私の意見です。現段階には、これこそまさに必要なことではないでしょうか」（Zook, November 28, 1921）としているのである。

先に見た全国会議委員会の議論と ACE のカレッジ・スタンダード委員会の議論を比較すると、ズークの発言の意味がよく理解できよう。両者ともに、大学教育の「スタンダード」を模索しているのであるが、全国会議委員会は「スタンダードに関して、その基本理念や概念までも議論する」という姿勢を堅持していた。しかしこのような姿勢は ACE の委員会がもはや受け入れるものではなかった。彼らが必要としたのは、「スタンダード」を策定することにとどまらず、それを、各種アクセディテーション団体が実務に採用できる「具体的な数値目標」として示すことであった。それは、この時点では「踏み込み過ぎたか」かもしれないが、「これこそまさに必要なこと」であったのである。「最低120セメスターアワー相当の履修」は、この時代、全国の大学でほぼ定着してきており、審議に参加した団体でもそれを前提としていたが、前述の（1）から（5）に示された他の数値は、ここに書き込まれることによって、まさにアメリカ大学の「スタンダード」になったのである。

こうした中、全国会議委員会は、その年次大会は継続していたものの、その存在意義はますます薄いものになっていった。1919年には、最大の地域アクセディテーション団体であるノースセントラル協会が全国会議委員会を脱会している。1922年にはニューイングランド協会も脱会を決定する。

1922年5月10日、カレッジ・スタンダード委員会が最後の作業を完了しようとしていたまさにそのとき、ケイブン理事長はバブコック（連邦教育局の高等教育専門官を辞任した後に、アメリカ大学協会の会長に就任）に以下の親展扱い書簡を送っている（Capen, May 10, 1922）。

貴殿はお気づきと思いますが、これは、安楽死のケースと言えましょう。（合同でのワシントン D.C. 会議を呼び掛けるという——引用者注）礼儀は尽くしました。カレッジおよび中等学校のスタンダードに関する全国会議委員会は静かに活動を停止するか、地方支部としてその名前を掲げることになるでしょう。カレッジ・スタンダード委員会はまだこのことを知らないわけですが、これこそが現在、おこっていることです。このようなやりかたをすることに、貴殿はご賛同いただけると思います。

この書簡に対して、バブコックは同じく親展扱いの以下の返書で応えている（Babcock, May 18, 1922）。

仰せのとおり、「礼儀を尽くした」わけです。そもそも、全国会議委員会とその活動は、アメリカ大学協会に比べると、よけいなものだと私は思っていました。しばらく前のことですが、ノースセントラル協会、全国会議委員会との関係が続けていくのか議論がおこったとき、私はぎわめて率直に、これ以上関係が続けても、ノースセントラル協会は何ら得るところがないし、全国

会議委員会の側も同じことだと申し上げたことがあります。この結果、ノースセントラル協会は全国会議委員会の会員であることを止めました。

他の多くのボランティアで実験的な教育団体の仕事をアメリカ教育審議会が静かに引き継いでいかないとしたら、それはむしろ驚きというものでありましょう。

こうして、全国会議委員会は、1922年の年次大会で、そのすべての機能を ACE のカレッジ・スタンダード委員会に委譲して解散することを決議する。全国会議委員会メンバーであった各ア krediteーション団体は、ACE に移動することになった (National Conference Committee, March 12, 1922)。ACE の側は1923年9月22日の執行委員会にて、全国会議委員会の決議を受け入れることを、さらには、全国会議委員会に残っていた活動資金の92.31ドルをも受け入れることを決議している (ACE. Executive Committee, September 22, 1923)。

ACE は「連合の連合」であるから、これが定めたスタンダードは、傘下にあるすべての団体が参照すべきものとなる。委員会の報告書・年次大会での決議は、ACE 機関誌 *Educational Record* にて逐次広報されていく。同誌は創刊以来、毎号のようにア krediteーション関係の論考を掲載し、かつ、毎年一度、傘下にある団体が公表した認定大学を集約し州別に整理した一覧の掲載を始める。これは、ACE 自身が認めるように、多くの遺漏があったものの、アメリカ合衆国大学史上初めての「全米的大学リスト」——掲載された大学・カレッジについては、ア krediteーションによって一定の質的保証が担保されていると ACE が内外に公式に宣言するものであったのである。

## 4. ディプロマ・ミル廃絶への運動と ACE

### (1) ACE とディプロマ・ミル

ディプロマ・ミルとは、以上のような全米的大学ア krediteーションへの ACE の努力を根底から無効にする存在であったから、ACE はこれを警戒、注視し、着々と情報収集を続けていた。

ACE アーカイブズ文書中、ケイプンのフォルダの中には、1921/22年度に ACE がディプロマ・ミルであると判断した大学を一覧にした文書があり、その数は、すでに消滅あるいは活動を停止したそれを含め、実に56校にのぼる (Capen, 1921-1922)。この数を、ACE の1922年度の「全米的大学リスト」に記載された大学数348校と比較すると、その問題の大きさが理解できよう (ACE, April 1922)。とりわけ、ACE が事務局を置いていたワシントン D.C. は、ディプロマ・ミルの暗躍の舞台ともなっていたわけであり、これらを野放しにしておくことはできなかった。

コロンビア特別区がディプロマ・ミル暗躍の舞台となったのは、ひとつには、同地はアメリカ合衆国の首都であったからということもあるが、最大の理由とは、コロンビア特別区においては、大学を設立すること、すなわち、設立認可状によって法人格を取得することがきわめて容易であったことである。実際、同地での「学術機関」の設立には、(1) 5人以上の発起人を集め、(2) 機関名、設立の目的、就任・設置予定の理事会メンバー名、教授数、教授科目等を記した申請書を、(3) 申請手数料95セントを添えて法務登録官に提出すればよく、実質的審査はまったくなく、「誰でも大

学が設立可能」の状態であったのである (House of Representatives, Seventieth Congress, 1928, 4)。

## (2) リサーチ大学のケース

ACEの事務局には、きわめて頻繁に、全米の大学、とりわけ、ワシントン地域に所在する大学についての情報照会の書簡が到着している。これに対して、ACEがディプロマ・ミルと判断した際には、照会者にはその旨を伝えている。この中で、ACEがもっとも警戒したのがリサーチ大学 (Research University) であった。

リサーチ大学の設立者はレイピーア (Louis Win Rapeer, 1879-1941) という人物である。彼は、1902年にインディアナ州立師範学校を卒業した。そのまま教師になることなく、シカゴ大学に進学し、1904年に理学士の学位を取得する。その後さらに、ミネソタ大学で1907年に修士号を、さらに1913年にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで Ph.D. 学位を取得する。学歴を獲得する中、彼はさまざまな職歴も経験している。すなわち、ミネアポリスにおける校長職 (1904-8年)、ワシントン大学シアトル校助教授 (1909-10年)、ニューヨーク市立カレッジ講師 (1910-11年) などと目まぐるしく、学位取得後も、イリノイ大学サマースクール講師 (1914年)、ペンシルバニア州立カレッジ教育学科長 (1914-17年) など、さらには、ポルトリコ大学学長 (1917-18年)、ノース・カロライナ大学講師 (1918年) 等を経て、ワシントン D.C. に National School for Social Research を設立 (1919-20年)、翌年これをリサーチ大学として再出発させている。教育関係の短期の仕事を次々に替えていったレイピーアは、伝統的な大学人からは、ある種の疑念を持たれてもやむをえない異色の存在であろう。他方で、以下で詳細に見るように、レイピーアによるリサーチ大学の構想は、みずからのキャリアを積み重ねていく中での経験に、その着想を得ていること——より高い学歴を必要とするにもかかわらず、在来的な大学教育の形式ではそれを満たすことができない膨大な人々の存在、大学レベルの通信教育の可能性、サマースクールの急速な発展、教員養成教育の高度化の進行など——が明瞭に読み取れるのである。

レイピーアは、*School & Society* 誌1923年8月11日号に、彼のリサーチ大学の理念と実践を公表する (Rapeer, August 11, 1923. 以下、本論文からの引用は頁数を括弧内に示す)。この論文は、アメリカ教授連合 (AAUP) の機関誌にもその短縮版が転載されており (Rapeer, November, 1923.), 当時、大学関係者の注目を集めたことを物語っている。彼はまず、これまでの大学をもちや、学生の要求、さらには社会の要求にあっていないものとして、「学生を、ほとんど価値のないさまざまな科目へと縛りつけ、彼らの時間の大部分を、カレッジでのほとんど無駄な時間に費やすよう強制する伝統」(156) を手厳しく批判する。不要な科目を履修することに費やされてきた時間はすべて、リサーチ大学では人生の根本的な問題に関連した諸科目の学習に充てられる。その目的とは、「社会的効率性をとおしての社会的幸福ということである」(160)。

ワシントン D.C. という都市は他にはない特徴をもっている。ここには、六万人を超える連邦政府の被雇用者が住んでいる。女性の労働人口比率が高いことも特筆されるべきで、これらの人々の教育的需要はきわめて大きい。他方で、同じく連邦政府等の公的機関で働いている、専門的知識・特殊技術をもつ人々の数も膨大である。加えて、文化都市ワシントン D.C. には世界最大の議会図

書館をはじめ多数の博物館・美術館など、教育・学習に利用できる知的資源も無尽蔵である。

リサーチ大学は新構想大学である。第一に、「これまで大学は研究に多大の時間と資源を費やしてきたが、自身の教育の問題についてはほとんど何も研究してこなかった」(159)。しかしながら、「今日、私たちには新たな心理学があり、これは、カレッジの教授法および学科目の選択とその編成の改革に用いられる」(159)。第二に、「学生は生活することによって生活の仕方を学ぶべきであり、(中略)実際に現実に直面することで学ぶべき」(159-160)なのである。

リサーチ大学には設立時の大学基本財産はない。また、大学基本財産増加の競争には加わらない。それは、私学の場合はドナーの、公立大の場合は政治的派閥の意向におもねることになり、大学のアカデミック・フリーダムにとって危険であるからである。

レイピーアの語るところには、1920年代初頭における教育革新のための最新の言説が散りばめられている。ポビットや、彼がその下で学んだ当時のコロンビア大の教授陣たち——カテル（キャッテル）やソーンダイク、デュイなど——の影響もまた認められる。レイピーアの斬新さは、これを大学教育の理論へと援用しただけでなく、それを実践して見せたことである。連邦政府の雇用者や教員と、政府内の専門家を教育＝学習の課程で結びつけるために、基本的に通常は夕方夜間の授業を中心として、これにサマースクールでの学修を組み合わせるというアイデアも興味深い。

リサーチ大学への新聞報道をたどっていくと、いくつかの例外を除き、地元新聞である二大紙『ワシントン・イブニング・スター』紙と『ワシントン・ポスト』紙には好意的な記事があふれている。さらに両紙は、その定期的な地元学校・大学短信の紙面で、他大学——ジョージタウン大、アメリカ・カトリック大、ギャロデット大など——と同格にリサーチ大の近況を報道するようになる。それらを辿っていくと、リサーチ大学がハード面でもソフト面でも着実に発展していく様子が手に取るようである。商業カレッジを大学の中核として設立するなどの新コースの開講（*Washington Post*, September 4, 1920）、リサーチ大学が企画し海軍放送研究所の協力をえておこなった北米への試験放送について（*Washington Star*, January 8, 1921）、大学がリースで入居していた建物を7万ドルで買い取ったこと（*Washington Post*, May 14, 1922）、その他、教員人事、名誉学位授与、市民向け無料講演会開催、あるいは卒業式典の模様についてなどである。著名人の同大学訪問記も数多く、たとえば、シカゴ大学のジャドソン学長が1921年5月に同大を訪問している（*Washington Post*, May 8, 1921）。ユダヤ系アメリカ人の新聞 *Jewish Advocate* 紙に至っては、「新大学、さまざまな機会を提供——高等教育を正しく民主化」という記者による大学訪問記を掲げ、「その博愛的サービスと効率性に、個人として共鳴したい。高等教育における新しい進歩的理念の成功」（*Jewish Advocate*, September 23, 1926）と絶賛しているのである。

しかしながら、ACE は最初からリサーチ大学を真正の大学とは認めなかった。

レイピーアは1921年10月、全米の大学に対して、リサーチ大学が出した単位・学位を認定してくれるよう書簡を送る（*Rapeer*, October 22, 1921）。その結果、1921年末から1922年にかけて続々と、全米の大学から ACE へ、リサーチ大学についての情報照会が届くようになる。これに対してケイプン理事長は一貫して、同大学を警戒し関係を断つよう熱心に忠告している。それらの書簡は、ケイプンがどのような大学観を抱いていたのかを垣間見せてくれる。

1921年11月9日付のタフツ・カレッジ学科長宛ての親展扱い書簡でケイブンは言う。「リサーチ大学を運営している人物は、意図的に詐欺をおこなおうとしているのではないと私は思います。彼は、幅広い経験と該博な知識の持ち主です。にもかかわらず、彼が企てていることは、現時点で、この国の指導的カレッジが認めるであろうものではありません」(Capen, November 9, 1921)と。これが、1922年4月19日付コロラド・カレッジ学長宛ての親展扱い書簡では、さらに手厳しくなる (Capen, April 19, 1922)。

彼には、波乱万丈の長い学問的な過去があり、その道程で、役に立ち興味深い多くの作品を生み出しました——もっとも、そのいくつかはお話にならぬ酷いものでしたが。3, 4年前でしたか、ポルトリコでの(大学学長という——引用者注)ポストを失ってから、彼はソーシャル・リサーチのための学校を始めました。その数ヶ月後、コロンビア特別区のいい加減な法人法を利用して、この機関を大学へと——あくまでも紙の上の話ですが——変更したというわけです。現在彼は、この機関で教える多くのパートタイム教師を雇っています。しかしながら、授業の大部分は、彼あるいは彼の妻がやっているようです。この大学は、私が見るところ、何ら<sup>エンダウメント</sup>大学基本財産を持っていません。ドクター・ズークと私は、本機関について慎重な調査研究をおこないましたが、連邦教育長に対して、連邦教育局が編纂している大学統計一覧に(リサーチ大学を——引用者注)掲載しないよう、すでに勧告をおこなっています。ということは、教育長報告での大学一覧がもとづいている、きわめてささやかでずぼらなカレッジの定義にすら適合しないということです。

1922年11月3日付のプリンマー大学の学事担当者宛の書簡(同じく親展扱い)の中ではケイブンはレイピアを、「異彩を放つがあまり信用できない人物」とまで酷評するに至っている (Capen, November 3, 1922)。リサーチ大学がどのように革新的な教育活動をおこなっていようと、この時点では8つの原則およびスタンダードがACE主導ですでに創られており、数値目標を定めた(1)-(5)のすべてにおいて「失格」と判断せざるをえなかったわけである。ましてや、<sup>エンダウメント</sup>大学基本財産をもたないことをむしろ矜持としている“大学”をACEが認めるはずがなかったのである。

### (3) リサーチ大学の告発へ

ディプロマ・ミルの根絶のためには、第一に、既存の偽大学の運営を停止させること、第二に、典型的なザル法であった前述の、ワシントンD.C.の法人法を根本的に改訂し、教育機関の<sup>チャーターリング</sup>設置認可そのものを規制するという二つが必要であった。いずれも、1910年代から指摘されてきたことであったが実現できなかった。それが、1920年代に入り、ようやく時が熟してきたのである。

既存のディプロマ・ミルの運営停止については、女性で初めて連邦検事に就任した副検事のマッコール(M. Pearl McCall, 1876-1977)がこれに関心を抱いた。この辣腕の法律家は、1923年、まったく学修を伴わないで学位を“授与”(手数料として50ドル-100ドルを徴収)していたオリエンタル大学の学長を告発、逮捕し、足掛け3年後の1926年1月、禁固2年および罰金1,000ドルの実刑判決に追い込んだのである (Washington Post, January 10, 1926, 2)。この告発・逮捕のために、マッコー

ル検事へ一貫して、オリエンタル大学についての詳細な情報を提供したのがACE、とりわけ、ケイプンの後任の理事長マン（Charles Riborg Mann, 1869-1942）であった。このマッコールが次に標的にしたのがリサーチ大学であった。1926年2月24日、ACE 副理事長、ロバートソン（David Allan Robertson, 1880-1961）は、合衆国検察官の要請で大陪審に出頭し、レイピア告発のための証言をしている（Robertson, February 26, 1926）。彼は、この時期に、ディプロマ・ミルについての論文二本を公表しており（Robertson, January 1926; September 1926）、この問題の専門家として、以降、頻繁に、マッコールと連携をとってゆく。

時期連邦議会に上程のための法案原案の討議が開始されたのが、1926年11月11日、商工会議所で開催された専門家会議であった。メンバーは、大学教育部会の委員長、教育委員会の委員長、アメリカ・カトリック大学、ジョージタウン大学、ジョージ・ワシントン大学の各代表、連邦能率局の代表、そして、マッコール検事であった。すなわちこの会合は、新法人法案上程のためのものであると同時に、当面のディプロマ・ミル撲滅運動の現状報告のためのものでもあったのである。

1927年4月4日、『イブニング・スター』紙はその一面で、「リサーチ大学首脳、郵便詐欺で告発」として、学長のレイピアおよび教務部長が告発されたことを報じた（*Evening Star*, April 4, 1927）。郵便法（Sections 3929 and 4041 of the revised Statutes of the United States）で規定される詐欺行為とされたわけである。懸賞等を装って金品を詐取する目的での郵便使用を禁じた法律を、無価値な偽学位を販売・送付したことへ“援用”したもので、当時、ディプロマ・ミル告発の常套手段であった。この報道は、当時のワシントン市民たちには、青天の霹靂というべきスクープであったかもしれないが、ディプロマ・ミル廃絶の運動を続けて来た関係者たちにとっては、これはむしろ予定されたものであった。そこには、以上に見たようにACEが最初から深く関与していたのである。

この法案および開催された聴聞会の内容の分析は、本稿の課題を超えるものであり、別の機会に譲りたい。しかし、聴聞会でのリサーチ大学教務部長証言によれば、告発が行われる以前の1926年の夏ごろから、リサーチ大学の学生あるいは元学生、教員が、マッコールによって次々と召喚され、リサーチ大学について尋問されるという事案が発生していた（House of Representatives, Seventieth Congress, First Session, 1928, 83）。リサーチ大学の関係者も、司法の側が、大学に対して嫌疑をかけていたことにすでに気づき始めていた。この後、連邦議会での審議がどのように進もうと、告発の事実が地元紙で報道された時点で、リサーチ大学の命運は尽きていたのである。

## 5. おわりに：全米的大学アクレディテーション形成に ACE が果たした役割

以上見たように、ACE は、1920年代のアメリカ合衆国高等教育界におけるアクレディテーション理念と制度の形成に、きわめて重要な役割を果たした。すなわち、個々の大学アクレディテーションが依拠する「全米のカレッジ・スタンダード」の策定に、積極的に関与していった。そこには、最強力の大学アクレディテーション団体であったアメリカ大学協会（バブコック）、連邦教育局（ブーク）、そしてACE（ケイプン）という三者が分かちがたく結びついていた。彼らは、カレッジの具体的な定義を試みるにあたり、当時としては画期的な、極めて多岐にわたった具体的な数値目標を

掲げた「全米のカレッジ・スタンダード」を創り上げるのに成功した。そのため彼らは、すでに全米のカレッジ・スタンダード実現に向けて尽力を重ねていた先行団体である全国会議委員会を「安楽死」させることも厭わなかった。

ディプロマ・ミルは、ACEの努力を根底から無効にするものであったから、ACEがこれを撲滅するためのキャンペーンに加わったこと自体は驚くことではない。ただしリサーチ大学は、他のディプロマ・ミルとは異なり、ケイブンも認めるように授業の実態はあったわけであり、その創立理念と運用方針を見るかぎり、それなりに革新的な高等教育を目指してはいた。それは、少なくとも彼らキーパーソンたちが経験した大学教育と比べればお粗末なもの映ったことは恐らく確かであろう。いわゆるキャンパスを持たない建物ひとつの大学という存在——ただし、このような大学は、当時（さらに今日でも）、さほど珍しい存在ではなかったはずである——も、この印象に拍車をかけたはずであろう。しかし、彼らは何よりも固執したのは、彼ら自身が、「全米のカレッジ・スタンダード」として創り上げた大学像そのものが毀損されることであり、これこそが、リサーチ大学をディプロマ・ミルとして力ずくで排除した理由であったと思われるのである。

## 【注】

- 1) ACEとアクレディテーションの関係を指摘した研究は、管見の限り、ホーキンス（Hawkins, 1992）が最初である。ただし、ACEが本格的にアメリカ合衆国界にその影響力を発揮するのは1930年代のことであり、ホーキンスもまた、これに多くの紙幅を費やしており、本稿が対象とした時代についての言及はない。

## 【参考文献】

以下の参考文献リストでは、American Council on Education Records, 1918-2004. Hoover Institution Archives, Stanford University. からのアーカイブズ文書はすべて、該当文書所収のBoxとFolder番号を示している。

坂本辰朗（2002）「20世紀初頭のアメリカ合衆国における女性高等教育改革」坂本『アメリカ教育史の中の女性たち』東信堂、205-248頁。

坂本辰朗（2009）「1920年代のアメリカ女性大学人協会（AAUW）による大学のアクレディテーション：ファカルティにおけるジェンダーの平等の問題を中心に」『アメリカ史研究』（32）、36-53頁。

The Association of American Universities. (1913). *Journal of Proceedings and Addresses of the Fifteenth Annual Conferences*, 56-62.

American Council on Education [Hereafter cited as ACE]. (July 21, 1919). Minutes of the Meeting of the Executive Committee. Box 1090, Folder 1.

ACE. (May 7, 1920). Minutes of the Meeting of the Executive Committee. Box 1090, Folder 1.

ACE. (December 4, 1920). Minutes of the Meeting of the Executive Committee. Box 1090, Folder 1.

- ACE. (Nov. 26 and 27. 1921). Minutes, Committee on College Standards. Box 37, Folder 6.
- ACE. (April 1922). Accredited Higher Institutions. *Educational Record* 3(2), 151-172.
- ACE. (July 1922). Report of the Committee on College Standards. *Educational Record*, 3(3), 210-214.
- ACE. (September 22, 1923). Minutes, Committee on College Standards. Box 37, Folder 6.
- ACE, Records of the Office of Director Mann. (1927). Research Universities [sic], Box 66, Folder 4.
- Babcock, K. C. (May 18, 1922). Babcock to Samuel P. Capen, Box 79, Folder 2.
- Capen, S. P. (1921-1922). Diploma Mills, 1921-22. Box 31, Folder 5.
- Capen, S. P. (May 10, 1922). Capen to Kendrick C. Babcock, Box 79 Folder 2.
- Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching (1906). *First Annual Report* Author.
- Hawkins, H. (1992). *Banding Together: The Rise of National Associations in American Higher Education, 1887-1950*, Johns Hopkins University Press.
- House of Representatives, Seventieth Congress, First Session. (1928).
- Jewish Advocate*. (September 23, 1926). New Type of University Offers Opportunities: Truly Democratizes Higher Education.
- Lagemann, E C. (1983). *Private Power for the Public Good: A History of the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching*, Wesleyan University Press.
- Lykes, R. W. (1975). *Higher Education and the United States Office of Education (1867-1953)*. U.S. GPO.
- National Conference Committee on Standards of Colleges and Secondary Schools. (April 17, 1908; October 9, 1909; January 28, 1911; March 24, 1917; March 10, 1921; March 12, 1922.) .Minutes.
- Rapeer, L. W. (October 22, 1921). Rapeer to Various Colleges and Universities. Box 66, Folder 4.
- Rapeer, L. W. (August 11, 1923). A New Type of University. *School & Society* 18(450), 156-162.
- Rapeer, L. W. (November, 1923). Research University. *Bulletin of the American Association of University Professors*, 9(7), 15-16.
- Robertson, D. A. (January 1926). Degrees for Dollars. *Educational Record* 7 11-24.
- Robertson, D. A. (Sept. 1926). The Educational Underworld. *North Central Association Quarterly* I, 246-52.
- U.S. Office of Education (1886-1887) *Report of the Commissioner of Education*.
- VanOverbeke, M.A. (2008). *The Standardization of American Schooling: Linking Secondary and Higher Education, 1870-1910*. Palgrave Macmillan.
- Washington Evening Sunday Star*. (August 29, 1920). Opening of Law School: Research University Elects W. P. Eagan Dean, 3.
- Washington Post*. (May 8, 1921). H. P. Judson Visits Research College [sic]: President of Chicago University at Capital Institution. 42.
- Washington Post*. (May 14, 1922). Building Is Acquired by Research School. 47.
- Zook G. F. (November 8, 1921). Zook to Samuel S. Capen, Box 37, Folder 6.

## University Accreditation and the American Council on Education

Tatsuro SAKAMOTO\*

This paper discusses the role of the American Council on Education (ACE) in affecting the establishment in the 1920s of the first national standards of colleges and universities, which were crucial for the beginning of higher education accreditation in the United States. ACE was founded as a coordinating body for United States voluntary associations of higher education during World War I. After the war, ACE started, as one of its first enterprises, a project to draft national standards for colleges and universities. The key persons in the project were George Frederick Zook, Chief, Division of Higher Education, United States Bureau of Education; Kendric Charles Babcock President, Association of American Universities; and Samuel P. Capen Director, ACE. They collaborated to create eight national standards that mostly employed quantitative indexes, such as “A college should require for graduation the completion of a minimum quantitative requirement of 120 semester hours of credit.” Since ACE was the only national coordinating body of various voluntary associations, “the association of associations,” its member associations had to refer to the standards that ACE created. Thus, ACE exerted enormous influence on each member association’s actual accreditation practices.

At the same time, ACE launched a campaign to eradicate diploma mills. Director Capen, his successor Charles Riborg Mann, and Vice Director David Allan Robertson all were vigilant against the ones that were located in the District of Columbia. Since the District in those days had the loosest incorporation law in the country regarding the establishment of higher education institutions, there were quite a few pseudo-universities there. ACE considered Research University, a new school established by a progressively minded educator, to be a diploma mill. Although Research University’s educational ideals and practices were innovative in their own right, it did not necessarily observe all eight of the national standards that ACE had created. Thus, ACE played a major role in the indictment of Research University and its president. Robertson was also one of the central figures who eventually created an anti-diploma law in the District of Columbia.

---

\* Professor, Faculty of Education, Soka University